

5 第33回秋田県教育研究発表会に参加して

教諭 富谷 朋子

期日 平成31年2月7日～8日

場所 秋田県総合教育センター

「郷土あきたの教育への提案」のコンセプトのもと、総合教育センター研究発表を始めとして、提案型の口頭発表、ポスター発表および講演を拝聴し、実践の糧をたくさん持ち帰ることができた。主体的・対話的で深い学びの視点をもって授業実践を積み重ねていくことが求められている今、教員も協働して対話を重ねながら研修していくことの重要性を感じた。また、他校種の実践例からも多くのヒントと刺激をもらった学びの多い2日間であった。

■第1日 2月7日（木）

（1）センター研究発表

基本研究課題に『未来を創る子どもに「生きる力」を育む教育の推進』を掲げ、本県の教育課題解決に向けた研究成果が発表された。（今年度は2年次計画の1年次）

① 主体的・対話的で深い学びの実現を目指す授業づくり

秋田の探求型授業の継承と発展を目指し、「Akitaractive Eye」と名付けた冊子が作成された。この冊子は初任者を主とした若手教員向けに作成されており、文章よりもイメージ優先で4コマ漫画と平易な言葉でポイントがまとめられている。冊子を活用した初任者研修の様子を拝見し、経験年数を重ねても初心を忘れずに新しい授業実践に取り組んでいく決意を新たにした。

② 論理的思考力を育む小学校プログラミング教育の在り方

小学校算数にプログラミング学習を取り入れた学習活動例を拝見した。プログラミング的思考を育むことが目的であるため、アンプラグド（コンピュータを使わないプログラミング）も紹介された。プログラミングと聞くとコンピュータを使うイメージを持っていたが、調理手順を考える活動もプログラミング的思考であり、自身の科目でも論理的思考を育成できる場面が多々あることに気づいた。今後はプログラミング教育を受けて育ってきた子ども達が高校へ入学してくることを意識して授業改善に取り組んでいきたい。

③ 感情統制に関する問題行動への対応における留意点の整理

センターへの教育相談事例や教員対象のアンケート調査に基づいた仮想事例を作成し、研修の進め方や考え方、ポイントを提案する研究であった。仮想事例を活用してアセスメントの仕方や校内連携体制が整備できること、経験年数にかかわらず多くの事例に触れておくことによって実例にもより良い対応が可能となると感じた。アセスメントシートは、事実と個人の解釈を整理して、全職員で情報共有やアセスメントできるシートなので校内でも活用したい。

（2）口頭発表

① 「内発的改善サイクルによる校内研究体制の在り方」

一教職員全体で取り組むカリキュラム・マネジメントを通して一

教科横断的な視点を取り入れたミドルリーダーを中心としてカリキュラム・マネジメントの実現を目指した研究であった。職員室に各学年の単元・題材配列表を掲示する取り組みが紹介され

た。高校でも他教科がどんな学習をしているのかを可視化して連携を図る仕組みを作っていきたいと感じた。また、管理職が考えるビジョンと若手教員との間にある認識の違いを埋めるためには、教務主任や研究主任がミドルリーダーとして活躍する必要があるという研究成果が報告された。

②命を大切に作る心を育む道德教育

「いのちの教育あったかエリア事業」を活用した取り組みが紹介された。命の尊さに関する研究授業では、役割演技や保護者から子ども達への手紙、気持ちを見える化する工夫により、実感を伴って命の大切さについて考えられる授業が行われていた。また、高齢者とのふれあい、赤ちゃん抱っこ体験、助産師による命の出前授業、動物とのふれあい、植栽活動などの体験活動を充実させ、「命」を多面的に捉えていた。家庭科では保育・高齢者・食育分野等、命や人権にふれる分野が多いので、実感を伴って考えられるような工夫をしていきたい。

(3) ポスター発表

①「連携・協働による地域活性化事例に関する調査研究」

～多様な連携・協働から見える社会教育行政の役割と可能性に関する考察～

拝聴した教員から、担当者が変わると活動が途絶えてしまうことや外部との交渉を先生方が個人で行っている点が悩みとして挙げられた。持続可能なシステムの構築が求められるが、そのためにも社会教育行政をぜひ活用して欲しいとの事だった。来年度からオーダーメイド型社会教育主事派遣事業が始まること、コミュニティスクールが有効であると説明があった。また、アンケート結果から、地域では学校に事業や行事を支える人材として活躍してくれること、知識やノウハウを地域に還元してくれることを期待する割合が多かった。労働力の提供や話題性だけにならないように学校教育目標やキャリア教育の視点から地域連携に取り組んでいきたいと感じた。

②「伝統野菜の栽培・活用を通じた農業科学館と学校との連携」

大曲農業高校と連携して伝統野菜を栽培し、園児を招いた収穫体験、伝統野菜クイズの作成などの取り組みが発表された。羽後町でも伝統野菜である「五葉豆」の加工品が販売されているので興味深く拝聴した。伝統野菜は限られた農家しか種を持っていないため、活用したい場合は栽培農家と契約する必要があるとのことだった。本校では地元の特産物を活用した商品開発に取り組んでいるが、野菜の栽培から収穫、加工、販売まで地域の皆様と生徒が協働して進めることや地域の子ども達や高齢者に還元することも視野に入れて進めていきたいと思った。

③「多様な児童生徒の個性を生かした学習指導の工夫と日常生活への意欲の高め方」

「あきたリフレッシュ学園」は学校を休みがちな児童生徒が宿泊体験や自然体験を通して心身のリフレッシュを図る機会を提供している。体験活動を通してコミュニケーション能力が付いてきたと本人が実感し、達成感や自信に繋がっていた。また、学習意欲の向上は理解度だけではなく体調や気持ちが強く影響する児童生徒もおり、学習形態などにも配慮する必要があることを学んだ。特に、睡眠等の生活習慣の改善は学校での指導が難しいこともあり、高校生も利用できる宿泊型のフリースクールが近隣にあれば学校、家庭、フリースクールと連携したいと思う。

■第2日 2月8日（金）

（1）ポスター発表

「生活自立に向けた個別の「生活実習」の実践」

秋田県立栗田支援学校では、卒業後の社会生活・職業生活を見据えて、通常的生活指導の他に個々に必要な体験や知識・技能の向上を図る活動を取り入れていた。家庭科でも生活的自立、経済的自立、社会的自立、精神的自立、性的自立を目標として学習しているが、家庭で実践している生徒が少ないのが課題である。寄宿舎生活の中でアイロンかけ、おにぎり作り、衣服の繕い、弁当作りに取り組んだ事例を拝見し、生徒達の自主性と根気よく練習する姿勢に感心した。本校でも簡単な内容から体験させて出来ることを増やし、意欲を高めていきたい。

（2）口頭発表

①「夜間定時制課程の高校における食に関する指導について」

～学校給食等を活用した取組～

秋田明德館高校定時制課程Ⅲ部（夜間）では「食に関する指導全体計画」を作成し、学校全体で食に関する指導に取り組んでいた。本校でも健康診断や食生活に関するアンケート結果に基づいて分掌と教科が連携して取り組んでいきたい。食生活の問題は、健康だけではなく情緒や意欲に与える影響も大きい。各家庭の事情もあると思うが、高校生には食事量、食事の内容、食事時間を自分で管理する力を身に付けさせたい。そして、卒業までには家庭と協力して、栄養バランスのとれた食事を調理できる技術を身に付けさせ、将来は発達段階に応じて家族の健康管理もできる生徒を育てたい。

②「地域の素材、人財、施設、共育力、事業を積極的に活用したふるさと教育の推進

—小中連携校とコミュニティ・スクールの充実を「強み」として—

由利本荘市立鳥海中学校は、地域に1つの中学校として「地域とともにある学校づくり」に取り組んでいる点や生徒数減少が喫緊の課題である点が本校と共通している。本校では郷土芸能部の部員数減少によって西馬音内盆踊りの担い手が少なくなっている。鳥海中学校でも本海獅子舞番楽などの横笛の演奏者が減っていることから、学校祭での収益金や各種事業の補助金を活用して全校生徒の横笛を購入し、鳥海郷土芸能保存会の協力のもと、週1回朝の学習時間に横笛講座を実施していた。また、担当者が変わっても継続できるように、横笛の手本DVDを作成していた。他にも、1年生の音楽の授業で鳥海郷土芸能保存会の方に民謡の演奏と歌唱指導をしていただいていた。これらの取り組みを参考に、本校でも郷土芸能継承の方策を考えていきたい。

（3）講演「情報に踊らされない為の4つのギモンとジモン」 白鷗大学客員教授 下村 健一 氏

スマホが普及してから生徒間の人間関係のトラブルに悩まされることが多くなった。生徒らは、人から聞いた話を事実か否か確かめることもなくすぐに広めてしまい、受け取った生徒も真実かわからない情報に惑わされている。学校ではメディアリテラシーに関する講話は行っているが、下村先生のような具体例を示した授業によって自分の行動がもたらす影響を考えさせ、情報を正確に受け取るための4つのギモンを教えていく必要性を感じた。4つのギモンとは、【①まだわからないよね？＝ソク断するな】情報を入手後すぐに広めてはいけない。情報の出所はどこなのか確かめよう【②事実かな、意見・印象かな？＝ウ呑みするな】情報を事実と発信者の主観に分けてみよう【③事実だとしても他の見え方もないかな？＝カタよるな】第一印象だけで判断しない。第二印象、第三印象もある【④隠れているものはないかな？＝ナカだけ見るな】である。情報はこれほどまで慎重に判断しないと誤った解釈が拡散し、

時には大きな事態を招いてしまう。しかし、自分の言動にこれほど責任をもってスマホを使用している生徒は少ない。間違った情報に踊らされたり、嘘の情報に騙されたり、無自覚による情報発信によって加害者になることがないように指導していきたい。また、4つのギモンはスマホの世界だけではなく友人との対話においてもいえることであり、より良い人間関係を築くためにも伝えていきたい。